

コケ散歩誌

今回は前回に続き、コケの生き方について探っていく。

生き方で言うと非常に厳しい条件で生きているコケがいる。苫小牧市の山、樽前山のコケだ。そのコケは八合目付近から上部の細かい火山礫の山腹に多く見られるハリスギゴケとシモフリゴケだ。八合目のこの場所は、年中強い風が吹き抜ける風衝地で、高山植物もまばらだ。そんな場所にこんもりと丸くまとまって土壌や岩に張り付いている。どうしてこのコケがこの場所で生きていけるのか想像してみよう。コケは生きていくために最低限必要な条件がある。光合成をするための光、水、二酸化炭素の三要素だ。光を遮るものがない斜面には大気と二酸化炭素は十分ある。一番の問題は水だ。山は天気の変化が地上より激しく、霧や雲が



かかりコケに水分を提供してくれるが、晴天になり、霧や雲が去り、強風が吹くと山の斜面はすぐに乾燥する。コケにとって乾燥は一番の敵だ。それを補ってくれるものが放射冷却だ。山の上は夏場でも気温が10度以下になる。日中との温度差が大きくなると結露によって朝露が出来、コケが必要とする水分を得ることが出来る。樽前山にあるコケは、この

朝露を利用し、日が昇るとすぐに光合成を行い、生きる源の糖分を作る。しかし、日が高くなり山の斜面が暖まると上昇気流が発生して山に風が起る。その風によって朝露もすぐに蒸発していく。コケにも同様に風が吹き、水分を奪われていくが、それを逃さないためにコケは小さな体で風をかわし、一本一本のコケが寄り添って、その茎と葉の隙間や基物（張り付いているもの）に張り付く仮根などに水分を貯め、わずかな水分も逃さないようにしている。しかし、風と強い直射日光によって、どんどん水分を奪われていくため、コケは、明日の朝露が来るまで、エネルギーを消耗しない休眠状態になって次の水分が来るのを待つ。

このようにコケの対応能力は高く、種によって好みの場所を選ぶ能力を持っているように推測できる。

例えば町中で生育場所として悪条件ではないかと思われるアスファルト上の切れ目や道路の縁石の仕切りを埋める目地の部分にもコケが見られるのだ。よく観察して見ると、雨などの水の流れがあり、水が溜まりやすく、コケが水補給の出る場所にいる。コケ観察をしながら、どうしてこの場所を選択したのか、コケの気持ちになり推理しながらコケ巡りをするのも楽しいかもしれない。

